

日本語研究と国語教育

日本語表現学者

半沢 幹一



『日本語学』（明治書院）という、国語教育の内容も含む季刊専門誌がある。それに、「ことばのことばかり」という連載コラムを書いている。かれこれ九〇回以上になるが、その中で、何度か国語教育がらみのトピックを取り上げてきた。中には、現場の先生方に非難されかねないようなことも書いてしまったのに、見事なくらい、何の反応もなかった。

読者から反応らしきものがあつたのは、一度だけ。『ご注文のほう、以上でよろしかったでしょうか』という、よく取り沙汰される言い回しについて、この「た」は過去だから間違いないというのは適切ではなく、客に対する配慮を示すものであると説明した回である。今でもなお、学校文法では、「た」は過去、という見方が根深く残っているようである。

かつて、あるカルチャーセンターの日本語教師養成講座の講師を、長いこと務めていた。文章・談話の分野の担当で、講義中、その構造分析の手法を示してみせると、多くの受講生から、それをなぜ国語教育に取り入れられないのかという意見が出て、当惑するしかなかった。

中一の説明文教材に、桑原茂夫「ちよつと立ち止まって」がある。学習のねらいとしては、「文章の構成を知る」とあり、くだんの文章が三部構成であることを学ばせらしい。

しかし、この教材には、文章研究において、

全体構造を捉える際に、表現上の指標とする、段落冒頭の接続詞だとか指示語だとか、内容相互の関係を明示する、有力な言葉がほとんど用いられていないのである。

それらを適切に補わせるためには、接続詞や指示語の体系を知る必要がある、それ抜きで、その文章構成を生徒に明快に理解させるのは容易ではあるまい。

大学教員時代は、国語の教職課程の授業も受け持っていた。とくに力を入れたのは、口語文法である。中学で習ったはずなのに、ほとんど覚えていない。だから、当然のように、その知識を教材の表現分析に生かすことも知らない。学生の発表に対して、なぜそのように考えるのかを問うても、「何となく」と答えるばかり。

国語教科書の大幅な改訂により、文学教材がないがしろにされるという批判が沸き起こった。しかし、である。それ以前から、文学教材の一つとしての、日本語表現の極みとも言える詩や短歌・俳句などがまっとうに扱われてきたのかという疑問がある。

学生に聞けば、ただ二、三度、音読しただけだったなどという声が大方だった。小説や評論などよりも、その読解・鑑賞には、文法をはじめとした日本語に関する知識に基づく表現分析が必要であるはずなのに。

たとえば、近代俳句の代表例とされる、高浜

虚子の「春風や鬨志いだきて丘に立つ」。この句の説明として、俳句運動史が引き合いに出されることが多く、そこから、中七の「いだきて」も、末五の「立つ」も、その主語は、表現されていない詠み手自身であることが導き出される。

しかし、初五末の「や」という切れ字は文法的な切れ目を表わしても意味的には以下とつながりがあること、「風」は「立つ」という動詞と結び付くこと、さらに、旧暦に基づく季語の「春風」はけつして生暖かくはないことなどをふまえれば、この句における「春風」と詠み手は、相拮抗した主体として捉えられることになり、その方が適切ではないだろうか。

筆者も所属する、表現学会という全国学会がある。六十年以上前の創設時の目的の一つに、日本語学あるいは表現学の知見を国語教育に生かすということがあった。当初は、大学教員だけでなく、小中高の国語教員の会員も少なからずいたが、近年は数えるほどしかいなくなってしまう。それに伴ってか、日本語研究と国語教育との距離が開いてきたように思われる。

以前に公刊した『文体再見』（二〇二〇年、新典社）の「第7章 文体教本」において指摘した問題がある。中高の国語教科書の「学習のポイント」欄などに「文体」という語が使われているのに、それがいったいどんなことを表わ

すのかという、肝心の説明が欠けているということである。

もちろん、「文体」という語が専門用語としても、その規定が揺れているという現実があるのは確かであるものの、それならばそれで、不用意に「文体」という語を持ち出しては、生徒を混乱させるだけである。

文章は、一文を基本的な構成単位として成り立つ。各文は文章における位置によって、役割を異にし、その中でとりわけ重要性を持つのは、文章がいかに始まり、いかに終わるかを示す、冒頭文と末尾文である。

これは、文章のジャンルを問わず、指摘しうることであるが、書き手の個性が色濃く見られるのが小説などの文学的な文章である。

拙著『最後の一文』（二〇一九年、笠間書院）は、まさにそこに焦点を当てたものであり、取り上げた近代小説五〇編の中には、教科書定番の作品もいくつか含まれている。

それらのうち、作品末尾の変更が物議をかもしたのは、芥川龍之介の「羅生門」と井伏鱒二の「山椒魚」の二編である。「羅生門」の場合、文字どおり最後の一文のみを、「下人は、すでに、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった。」から「下人の行方は、誰も知らない。」に変更することによって、作品全体の主題までを一変させてしまうことになった。

「羅生門」が教材として扱われるとき、このように重要な意味を持つ、最後の一文のありように触れられているのかしらん。

日本語学や文章表現に関する大学テキストにも何冊か関わってきた。出版社からは、いつからか、テキスト本体だけでなく、課題ドリルや解説書も付録に付けることを求められるようになった。そうしないと売れないというのである。しかし、高校までの教科書は、それどころではないことを思い知らされた。

たまたま教育実習生から、教科書会社の指導参考書を見せてもらったところ、啞然とするばかりだった。板書の実例が、色遣いまで含めて紹介されていたり、試験問題のサンプルが示されていたりする。

それほどに教育現場の状況が厳しいということなのかもしれない。しかし、それゆえにと言うべきか、こんなケースもある。

数年前まで、現任教員を対象とした免許更新講習というのが実施されていた。それに参加したことをきっかけに、一人の中年の卒業生が、専任教員を辞めて、大学院に入る決断をした。そして二年後に無事修士課程を修了すると、別の学校に復帰し、今も、元気に働いているという、嬉しい年賀状が届く。

他人事ではなかった。自分も還暦を過ぎてから大学院に戻り、博士論文をまとめた。